

## ●利用者9● 80代 男性

### 【通いで利用してきた馴染みの場所で看取り支援】

- ✓介護者も疾病を抱えており、介護負担がかからないように支援
- ✓延命治療は行わず、昏睡状態になってからは、泊まりで過ごす。地域に身近な馴染みの場所であり、本人も家族も安心して最期までの時間を過ごす

## 1. 利用者の基本情報

世帯構成	妻、娘、孫二人と同居				
介護力	主たる介護者は妻。常時、介護できるが、持病があり、負担はかけられない。				
要介護度	要介護5				
障害高齢者の日常生活自立度	C2		認知症高齢者の日常生活自立度	M	
ADL	移動	食事	排泄	入浴	着替え
	全介助	全介助	全介助	全介助	全介助
主な傷病	・パーキンソン病 ・アルツハイマー型認知症				
必要な医療処置	・看取り期のケア ・たんの吸引 ・注射・点滴 ・褥瘡の処置 ・服薬管理 ・浣腸 ・摘便				
ターミナル期	ターミナル期		病状の安定性・悪化の可能性	不安定・悪化の可能性あり	

## 2. 利用開始の経緯

### <主介護者が退院直後で介護ができないと他法人のケアマネジャーより紹介>

- ・主たる介護者の妻が緑内障の手術で入院中、特別養護老人ホームのショートステイを利用していた。退院後の妻が、認知症で夜間にせん妄のある本人の介護を行うことは難しいため、他法人のケアマネジャーより紹介があった。妻には、心疾患の持病もあった。
- ・同居している娘家族は仕事や学校があり、介護に関わるができなかった。

## 3. 利用開始直後のサービス提供状況

### <介護者が退院直後のため泊まりから開始>

- ・介護者が退院直後の介護に対応できないため、急遽、泊まりから開始した。認知症のため、ベッドの上に乗って、いろいろなものを引っ張ろうとしたり、戸やシャッターを開けようとした。スタッフは無理に止めず、見守る対応を行った。
- ・パーキンソン病のため、時間ごとに（6時、10時、14時、18時、20時）、服用が必要な薬があり、薬のコントロールも必要だった。
- ・自宅が近く、妻は自転車で事業所に来ることができた。

※利用開始から最初の2週間のサービス提供状況

	1 日 目	2 日 目	3 日 目	4 日 目	5 日 目	6 日 目	7 日 目	8 日 目	9 日 目	10 日 目	11 日 目	12 日 目	13 日 目	14 日 目
通い	○	○	○	○	○	○		○		○			○	
泊まり	●	●	●	●	●									
訪問(介護)	□ 1回			□ 1回	□ 1回	□ 2回		□ 2回		□ 2回			□ 2回	
訪問看護 (同事業所: 医療保険)	★ 1回	★ 1回	★ 1回	★ 1回	★ 1回	★ 1回		★ 1回		★ 1回			★ 1回	

#### 4. その後のサービス提供状況

<介護者に心疾患があるため、本人の状態悪化後は泊まり中心に>

- ・心疾患のある妻一人での介護は、身体的、精神的負担が大きかった。時折、発作を起こしており、夫の状態が悪化してからは、泊まり中心の利用に切り替えた。娘が同居しているため、仕事が休みの週末は自宅へ戻るようにした。
- ・その後、穏やかに過ごしていたが、徐々に目覚めない時間が長くなり、自宅で、2日間、全く起きないこともあった。その間、服薬や食事もできない状況にあり、妻が心配になって事業所へ電話をかけてきて、併設の訪問看護ステーションより医療保険の訪問看護で訪問するなどして対応してきた。
- ・大学病院に通院していたが、それも難しくなり、延命治療を行わないとしていたため、大学病院から訪問診療に切り替えた。

<状態変化への対応>

- ・亡くなる3か月前頃より、自宅で覚醒せず、通いを休むことが多くなった。食事摂取も一日に1～2回になることがあり、体重も減少してきた。2日間、全く覚醒せず、救急車で大学病院に運ばれたが何の加療も受けずに帰宅した。家族・主治医・事業所での話し合いの結果、自宅・事業所への送迎も難しくなったため、泊まりを利用し続けることとなった。目覚めた時に水分や薬を勧めた。全身清拭・排便のコントロール・皮膚処置・マッサージ・関節可動域訓練等も継続して行った。

**【変化の状況】2日間覚醒せず救急搬送**

	1 日 目	2 日 目	3 日 目	4 日 目	5 日 目	6 日 目	7 日 目
通い	○	○	○	○	○	○	○
泊まり	●	●	●	●	●	●	●
訪問看護 (同事業所: 医療保険)	★ 2回	★ 2回	★ 2回	★ 2回	★ 2回	★ 2回	★ 2回

<延命はせずに2か月経過。最期も妻が付き添い事業所で看取り>

- ・家族は延命を希望していなかったが、水分くらいはと、医師の指示を受けて看護師が点滴を開

始した（1日 500ml×2本）。当初予測していた期間は延び、点滴開始2か月が経過した。多くの時間は眠られてたが、時々目を開け、うなずいたり笑顔を見せてくれた。妻と家族は延命はしないことに決めたものの途中迷いが生じた時もあった。事業所のスタッフは、その時毎話をよく聞き、心に寄り添えるように努めた。

- ・徐々に痰が多くなり、尿量は少なく水様便が続いた。本人の反応がわずかとなり、開眼も少なくなってきた。浮腫みが出始めてきたため点滴を1日1本に変更した。
- ・妻は一日に何回も来所し、そばに付き添った。点滴だけで2か月と9日間を頑張られた。最期を看取った妻と娘さん達の満足そうな表情とさわやかな雰囲気はとても印象に残っている

#### ※直近2週間のサービス提供状況

	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	7日目	8日目	9日目	10日目	11日目	12日目	13日目	14日目
通い	○	○	○		○	○	○	○	○	○		○	○	○
泊まり	●	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	
訪問 (介護)			□ 1回		□ 1回									
訪問 (看護)			☆ 1回											
訪問看護 (同事業所: 医療保険)	★ 2回	★ 2回	★ 2回	★ 1回	★ 2回	★ 2回	★ 2回	★ 2回	★ 2回	★ 2回	★ 1回	★ 2回	★ 2回	★ 1回

#### ○サービス利用の効果

- ・家族は、事業所で状態をみてくれていることで安心感を得ていた。
- ・本人が元気な時は通いを楽しみにしており、最期の時をなじみの場所で過ごせることに、喜ばれているようだった。
- ・水分の点滴のみで2か月以上を泊まりで過ごしたが、その間、妻は事業所に通う中で、不安や自らの気持ちを職員に話すことで、精神的な負担を軽減することができたようだった。
- ・最期の時を自宅で迎えることは、家族にとって不安なことである。なじみの場所、なじみのスタッフ、住み慣れた地域だからこそ、本人・家族にとって安心して最期を迎えることができたと感じる。